

『佐賀市から世界遺産を！！』

幕末佐賀藩の海軍教育施設

— 三重津海軍所跡 17区発掘調査 現地説明会資料 —



◇世界遺産登録と三重津海軍所跡 — 『九州・山口の近代化産業遺産群』 —

平成 21 年 1 月 5 日に、『九州・山口の近代化産業遺産群』が世界遺産暫定一覧表に記載されました。『九州・山口の近代化産業遺産群』は、九州各県や山口県に残る幕末から明治にかけての産業遺産に注目し、「工業国家日本の台頭」をテーマとして世界遺産への登録を目指しています。

日本で最初の実用蒸気船「凌風丸」の製造に成功した三重津海軍所跡は、幕末段階における近代工業化の先駆けとして、『九州・山口の近代化産業遺産群』の構成資産候補の一つに挙げられました。

◇三重津海軍所跡の国史跡指定へ向けて

三重津海軍所跡が、世界遺産として登録されるためには、まず国の史跡に指定され、遺跡を将来に向けて保護していくことが前提条件となっています。そのため、佐賀市教育委員会では、三重津海軍所跡の国史跡への指定を目指して、遺跡の範囲確認や歴史的価値についての調査研究を進めています。

今回の海軍寮エリアの調査によって、三重津海軍所の始まりや変遷について解き明かし、歴史的価値の証明へとつながっていくことが望めます。

○発掘調査の成果（17 区）

【調査の目的】

発掘調査を実施した 17 区は、三重津海軍所跡の北東端、海軍寮^{かいぐんりょう}エリア（p.8）に含まれます。

このエリアでは、前回の試掘調査で、江戸時代後期から幕末期の出土遺物を伴う建物跡が確認されましたが、建物の規模や形状などについての詳細な情報は分かりませんでした。

そのため、今回の発掘調査では、海軍寮エリアの遺構内容を確認することと、三重津海軍所跡の遺跡の範囲を確認することを目的としています。

【調査成果】

約 600 m²にわたる調査区からは、掘立柱^{ほったてはしら}建物跡や、江戸時代中期から末期の磁器片などが検出されています。調査成果としては、以下のことがあげられます。

① 掘立柱建物跡

建物跡には、柱下部に板材が据^すえてあることが確認されました（p.3,図 2）。これは、低湿地対策を施したもので、地盤沈下^{じばんちんか}を防ぐための建物構造であったと考えられます。また、掘立柱建物の柱列が、御船屋^{おみなや}（三重津海軍所より以前にあった佐賀藩の和船を管理する施設）または三重津海軍所の時期に属する可能性が高いということも分かりました。

② 三重津御船屋絵図との照合

発掘調査により確認された建物跡は、「三重津御船屋絵図^{みえつおみなやえず}」（三重津海軍所設置以前の絵図、p.6,図 3）に記された建物と同様の細長い規格（幅 4m×長さ 14m以上）であることがわかりました。

また、三重津御船屋絵図には、さしがね（L字）形の堀が描かれていますが、17 区の調査では、この堀跡の可能性が考えられる溝跡も検出されています。

これらのことから、三重津御船屋絵図に描かれた建物や土地利用についての記載は、信ぴょう性が高いということが考古学調査によって裏付けられました。

【今後の調査に向けて】

今回の調査により、絵図などの文献史料と考古学資料との照合が進展し、三重津海軍所跡の調査精度が今後更に高まるものと思われまます。17 区で検出した建物については、海軍所期のものか、またはそれ以前の御船屋時代のものなのか、詳細な所属時期を確定し、三重津海軍所の全容解明に一歩でも近づけるように努力していきたいと考えまます。

【発掘調査位置図】

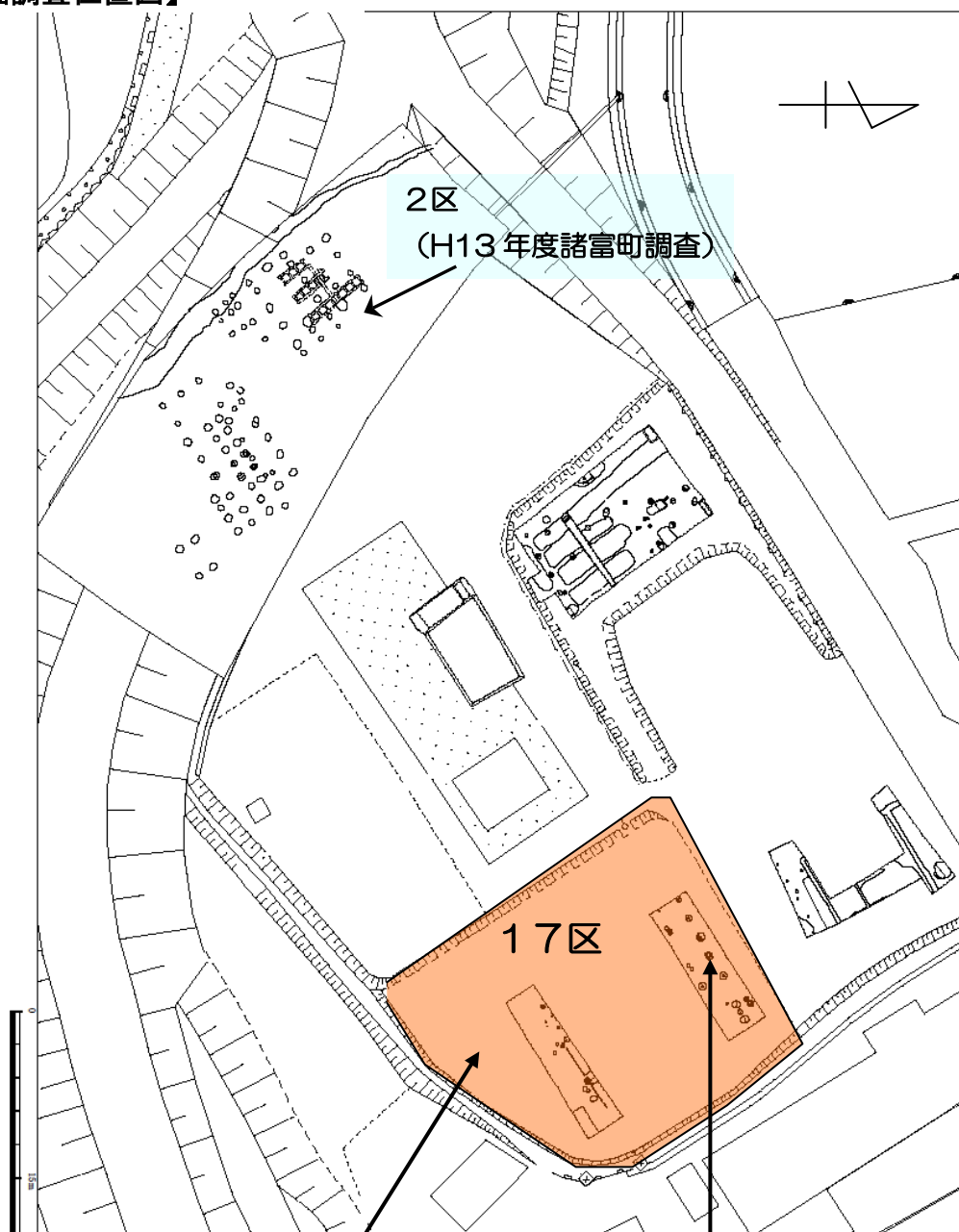


図 1：発掘調査地点全景



図 2：掘立柱建物の柱とその下部に据えられた板材

船渠護岸造から出土した船舶用綱具（ロープ）



（特徴）

植物繊維束（縄）を布で包み、リング状に廻したうえで縄で結び留めている。一端は出土した時点で既に破損しており、破損した状態で廃棄されたものと判断される。

遺物の残存状況は非常に良好で、布の表面や縄、縄の結び方等の詳細な観察は可能だが、布で覆われているため、内部の構造は不明。

今後内部構造を観察する科学的分析（CT撮影）を検討中。

（年代）

出土した土層（海軍所船渠造成土直上）で、19 世紀後半の陶磁器がまとまって出土していることから綱具の所属年代も幕末と考える。

（大きさ）

- ・残存長 22cm 径 2cm 程
- ・リング状に廻した端部
外径 6cm 程 内径 1.5cm

船舶用綱具（ロープ）製作手順

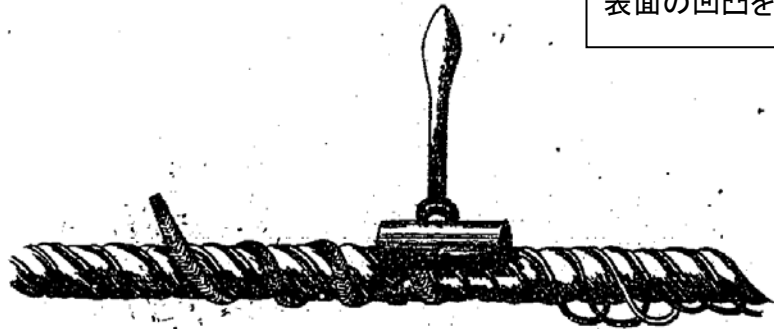
原典：『英国運用全書』明治 4 年

（原書は G. S. Nares 『Semanship』 第 4 版 1868 年）

図七十八第

製作手順 1（填巻）

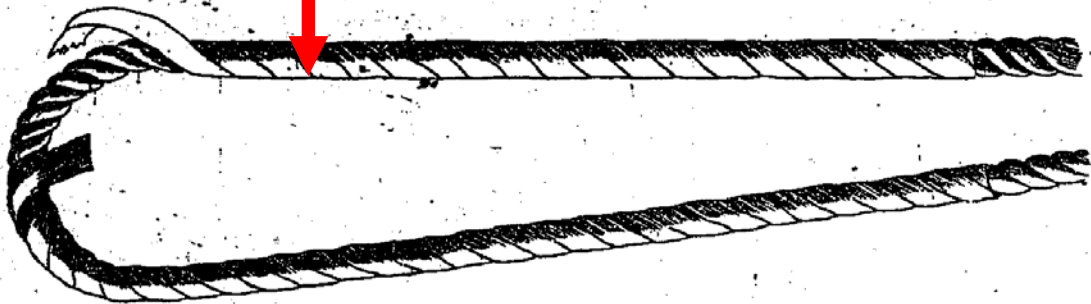
ロープの溝に沿って細索を埋め、
表面の凹凸をなくす。



図八十八第

製作手順 2（被巻）

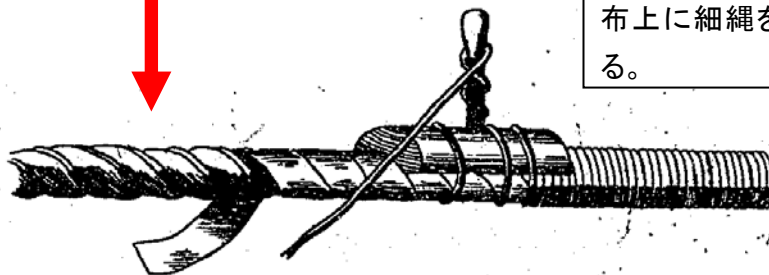
古帆布などでテープをつくり、これにター
ルをしみ込ませて、ロープの縞りに沿っ
て巻く。



図九十八第

製作手順 3（上巻）

布上に細繩を巻き付けタールを塗
る。



◎出土遺物は手順 3(被巻)の布上に巻かれた細繩の一部までが残存している状況と推定している。

○三重津海軍所とは

【海軍所が設置される以前の三重津】

江戸時代、佐賀藩は藩の和船を管理する「船屋」を藩領内に 6 ヶ所設置しており、その内の一つが三重津でした。江戸時代中期には、三重津で佐賀本藩の船の約 2 割 (29 艘) を管理し、藩内でも重要な地域だったようです。

幕末、嘉永 6 年 (1853) にペリーの艦隊が江戸湾内まで来航してきたことを受け、幕府は大船製造の禁を解除しました。これにより大型軍船の製造が許可されたこととなります。

佐賀藩は安政元年 (1854) 11 月に蒸気船の製造を企図し、三重津を製造場所を選定しました。この時期の作成と推測される「三重津御船屋絵図」によると、従来の建物に加え、新たに材木小屋や細工場等を設置し、舟入場を浚渫して深くする計画であったことがわかります。

その後、安政 3 年 (1856) 3 月までに蒸気船製造用の資材が集積されていましたが、この時期に、実際に蒸気船の建造は行われなかったようです。

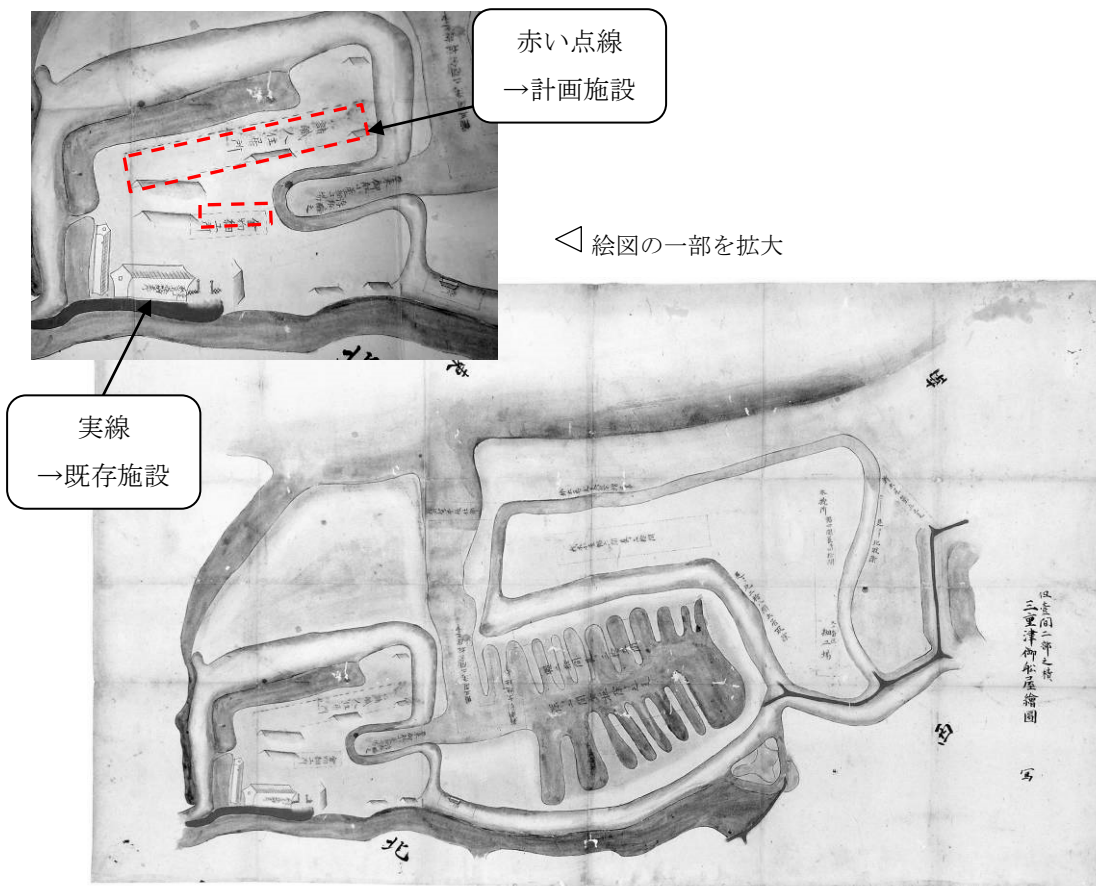


図 3 : 「三重津御船屋絵図」(佐賀県立図書館蔵 郷土 1058)

【三重津海軍所が設立された経緯】

安政 2 年(1855)、幕府が海軍伝習所を長崎に設立し、佐賀藩も多くの藩士を参加させました。安政 5 年(1858)には藩内の船手にもオランダ人より学んだ洋式船の運用技術等を教育するため、三重津に「御船手稽古所」を設置しました。

翌年、長崎海軍伝習所の撤収に伴い、佐賀藩は藩内での海軍教育を継続・充実させるため、船屋の西一角を「海軍稽古場」として拡張し、役所の出張所に続き、稽古人の宿舍や調練場を設置し整備しました。それとともに、当時所有していた蒸気船や帆船など佐賀藩艦船の主要港を三重津に定め、艦隊根拠地としての体裁も整えました。

艦船は常時、三重津に出入りしていたわけではなく、多くは現在の有明佐賀空港に近い沖合(網洗)に停泊していました。そのため通常は、沖合に停泊中の艦船と海軍所間の人員や物資の移送を小型船で行っていたようです。このようにして三重津に、海軍教育の機能と洋式船の運用機能が附加されたのでした。

その後も、蒸気船を運用する上で必要なメンテナンスの部品等の製作や電流丸の交換用蒸気罐(ボイラー)を製造した「製造場(製作場)」(ワークエリア)、船の修理をする際に船を引き入れる「修覆場」(ドックエリア)の整備が行われました。この結果、三重津海軍所の範囲は早津江川西岸の河川敷、全長約 600m になりました(参考『三重津海軍所図』大正期)。

三重津海軍所は、明治初期に閉鎖されたと思われませんが、その時期などの詳細については明らかではありません。跡地は、明治 35~昭和 8 年(1902~1933)に佐賀県立佐賀商船学校として利用されました。現在では、三重津海軍所跡の大部分が、海軍所の主任であった佐野常民の名を冠した佐野記念公園となっています。

【三重津における海軍教育】

前述の通り、安政 6 年(1859)、幕府の長崎海軍伝習所の閉鎖に伴い、三重津には教育を行うための施設が整備されました。大正時代に描かれた絵図では、役所や教育施設が三重津海軍所跡の北東に記されており、ここが海軍寮エリアと考えられています(参考『三重津海軍所図』大正期)。そこでは、長崎で学んでいた人びとを教導(教官)として、海軍教育を行うこととなります。海軍寮では、航海術や蒸気機関に関する機関術など洋式船を運用する上で必要な学科を教えていました。また海軍教育は陸上だけではなく、実際に船に乗組んでの実地訓練も行いました。

このように三重津海軍所では、洋式海軍の教育が行われ、ここで学んだ人々は佐賀藩の海軍を支えただけではなく、明治維新以後にも海軍の分野などで活躍しました。

